地域コミュニティや防災拠点のための体育館・屋外トイレ

学校施設の重要な役割の一つとして「地域コミュニティや防災の拠点」があります。学校施設は、地域住民の生涯学習、文化、スポーツ活動の場であり、そして災害時避難所として防災機能の強化をはかり、地域コミュニティの拠点となるよう公共施設の複合化も有効であるとしています。今回、研究会でも各地の学校で体育館トイレや屋外トイレを現場取材し、その重要な役割を再認識してきました。

横浜市 01 KANAGAWA 神奈川県

トイレ改修を進める中 体育館トイレにも着目し、さらに洋式化を推進

和式便器が使われていない状況が明らかに

家庭では洋式の大便器なのに学校のトイレは和式。そのためトイレに行きたがらない子どもがいます。特に外国人登録者数が年々増えている横浜市では、外国人の児童生徒数が増加。和式便器を見たことさえない子もたくさんいます。洋式化が進んでいない学校では、洋式ブースに行列も。こうしたことから、市ではトイレの洋式化を急ピッチで進めています。

「２０１４年度は、30校についてトイレ改修を行う計画でしたが、緊急性を要するため、洋式化を進める15校をプラスしました。学校への調査によって、和式があまり使われていない状況も明らかになりましたので、現在は、洋式化をスピードアップして進めています」（市教育委員会・川崎修司課長）

また、同市では、約５００校ある小中学校のうち、小学校３４０校、中学校１０４校、廃校等（県立含む）10校が、災害時の防災拠点に。この観点から、トイレ改修に関する基本的な考え方にも変化が表れています。

「これまでは、普通教室のある校舎を優先で改修し、体育館はあまり重視されてきませんでした。多機能トイレについても、特別な配慮が必要な児童生徒の入学などに合わせて整備するという対応でした。ですが、地域のさまざまな方が学校を利用する今、体育館のトイレや誰もが使える多機能トイレの重要性も増してきました。現在は、多機能トイレは校内に最低一つは設置し、できれば体育館に、という考え方に変わってきました」

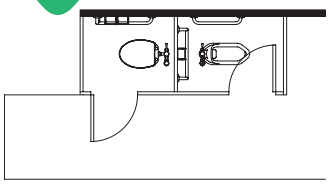
２０１４年度、横浜市は体育館トイレも先行して、洋式化の改修を行ってきました。

トイレの快適さは平等であるべき

トイレを洋式化する際、問題になるのはドア。学校トイレは子どもたちがドアに衝突するのを避けるため、基本は内開きです。ドアを手前に開けたとき、

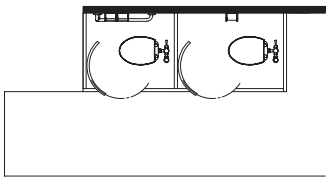
横浜市立潮田小学校

体育館
女子トイレ



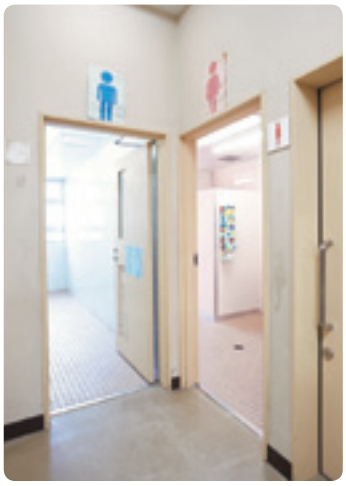
～ 改修前 ～

和式便器は内開き、洋式便器は外開き。動線を遮るちぐはぐなつくりとなっていた。



～ 改修後 ～

アークスライドドアにより、ブースサイズを変更することなく個室空間と通路をしっかり確保。



入口は段差がなく、高齢者にも安心なつくりとなっている。ブースを改修し、床面のタイルは一部を補修。

ブースのスペースを変えずに和式便器を洋式にするため、ドアは弧を描いて開閉するアークスライド式に。

潮田小学校には日本人を含め16カ国の子どもたちが通う。

ドアが外側に開くことがないので子どもに安全。曲線の膨らみで空間の印象もソフトに。

D A T A

- 竣工年月／2014年9月
- 所在地／神奈川県横浜市鶴見区向井町3-82-1

横浜市立神奈川小学校

災害時に避難所になることを想定し、誰もが使いやすいようエントランスにはスロープを整備。

D A T A

- 竣工年月／2015年2月
- 所在地／神奈川県横浜市神奈川区東神奈川2-35-1

地域における学校体育館の役割が高まってきたことから、トイレも含めた体育館の大規模改修を実施。多機能トイレなども充実させた。

和式の場合は便器の上を通るので、問題ありませんが、洋式便器の場合、便器にぶつかる可能性もあります。それを避けるためには、ブースのスペースを広げなければならず、トイレの数を減らすことになります。

「限られたスペースで使い勝手をよくし、安全性を高めるため、ドアが弧を描いて開閉するアークスライド式を採用しました」

横浜市では、トイレの改修にあたり、市内の小・中学校にアンケートを実施。洋式便器がわずかに15％しかない学校があることも明らかになりました。

「全体でみると、洋式化率は65％ですが、バラツキがある。そのため、これまでは、築年数の古い学校からトイレ改修を行っていましたが、２０１５年度からは方針を変え、洋式化率の低い学校から改修を進めることにしました。子どもたちが毎日使うトイレの使い勝手は、できるだけ平等にしてあげたいのです。今後３年間でできるよう、洋式化を進めます。限られた予算を上手く使うには、現状をしっかり把握し、本当に必要とされるところに予算を配分していくことが何よりも大切なのです」